
十一人の家族

カッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十一人の家族

【Nコード】

N4859V

【作者名】

カッシー

【あらすじ】

六人の女子と三人の男子そして二人の親、この物語は一家の次男秋山賢治を中心にして動くドタバタギャグコメディだったりなんだり！

十一人の家族（前書き）

！ 男子三人と女子六人、親二人が繰り出す。日常ギャグコメディです

十一人の家族

さあ、早速だが自己紹介と行こう。俺の名前は秋山賢治、まあごく普通の一般人だ、そんな俺が転生するーというテンプレなパターンでもなんでもなく、ましてやバトルものでもなんでもない。そんな俺の日常風景

「朝だよ、起きろ」

どこからともなく聞き覚えのある声が聞こえる。何だろう、神様のお告げかな？

「あと一時間三十分」

無意識にそう答える俺

「ほお……準備はいいかな？弟君」

ポキポキと言う音がする。何だろうおきななければいけないような気がする。ってか起きろ！俺！

「起きました隊長殿！」

「うん、よろしい。朝ごはんだから起こせて」

「ほいほい」

そう言って出て行った俺の姉、詳しく言うと名前は秋山優衣。高校二年生の俺の姉だ。一言で表すととなると……暴力女だな

「何か言った？」

「いえ、何もありませんよお姉さま」

なんとという姉だ！テレパシー的な事が出来るとは……！

「あ、涙起こしとして」

「えーあいつ寝起き悪いし」

「分かった？」

「分かりました。オネエサマ」

姉ちゃんの殺気は軽く戦闘力一万越すな

そんな事を考えながら妹達の部屋に行く……

「おゝもう涙しか残ってない」

その他この部屋にいた奴らは朝食を食べに行ったらしい。行動の速い奴等だ

「おー兄貴ゝそこがいいと思うぜ」

どこがいいんだよ、と突っ込む。ちなみにこいつは四女の秋山泪。中学校一年生だ。女子なのだがものすごくボーイッシュだ。一体誰に似たんだが

「おい涙、起きろ朝だぞ〜」

「うーん？浅 真央？」

何で浅 真央何だよ…夢に出て来てんのか？

「おい、起きろ。起きないと優衣姉ちゃんの鉄拳が……」
「起きました！」
「よし」

優衣姉ちゃんは最終奥義だな

「で、なんなの兄貴？おはよつのキスは？」

「意味が分からん。とにかく朝ごはんだ。早く行け」

「うー、了解」

そう言って走り去って行く泪。ってかおはよつのキスって……何考えてんだ？

「おはよう兄ちゃん」

そしてやっと食べれる。と、思った矢先

「よう、海斗」

小学五年生の唯一の弟、秋山海斗が現れた

「朝食は？」

「もう、桜と一緒に食った。登校班が今日速いんだよ。だからもう行く」

「そうか、遅れんなよ」

「兄ちゃんの方がよく遅れてんじゃん」

「いや、兄の意地だ」

そう言つと海斗はうーんと唸つて

「兄の意地というものが分からない」

「そりゃそうだ。お前は下が全員妹だしなしかも二人」

「そうかもね。じゃいつてくる!」

「行ってらっしゃい」

そう言つて出て行った俺の弟。兄としての意地を分からしてやりたい

「賢治お兄ちゃん」

「おっ!桜」

突然現れた人物にビクツとする俺。その正体は六女で小学三年生の秋山桜だった

「どうした?」

「兄の意地って……なに？」

難しい事を聞いてきた桜。いや、難し事でもないか

「うーん、そうだな。妹や弟に恥ずかしい所を見せたくない！って所かな？」

「じゃあ私にも？」

「ああ、お前は妹だしな」

「良かった」

そう言っつて胸を撫で下ろす桜。何が良かったんだ？

「じゃあ行ってきます」

「うん。行ってきます」

そう言っつて海斗を追いかける桜。それを見届けた後、やっとの事でリビングについた

「母さんおはよう。父さんは？」

「今日は朝早くから仕事って言って出て行っちゃった」

「ふーん」

父さんは結構会社では人望も良く、出世をしたから結構お金を持っている。だけど俺達の出費やら何やらでごく普通の家庭になってい

る。ここまで家族が多いのに普通に暮らせるなんていいな。とよく思うこの頃。

「ほら、早くご飯食べちゃいなさい」

「了解」

そう言って座る。この結構大きなテーブルに今現在座っているのは

……

「英治兄ちゃん」

「何だ？」

まずこの人、秋山家の長男にして俺の唯一の兄。ありがたき兄の存在でいろんな事を手伝ってくれた。因みに高校一年生。これで秋山家の男の紹介は終わり。

「家帰ったら、ゲームの大乱闘しよう」

「OK」

因みにゲーム好きで、色んなゲームを持ち、よくゲームソフトを貸してくれる。因みに大乱闘は家族全員やり方を知っていて唯一皆で遊べるゲームだ

そしてこの人

「恵美姉ちゃん」

「なーにー」

この人が最大にして最強の姉、秋山恵美！大学三年生でかつての秋山泪を一発で倒し、英治兄ちゃんと喧嘩して勝った程だ（結構兄ちゃんは強い）

ただ面倒くさがりやで、ほとんど怒った事がない。そして、俺をどこぞの鬼から守ってくれる唯一の人物

「お酒は程々にね」

「りょーかーい」

ただお酒を飲む。酒癖は強い方でそこはいいが、いつ、何かが恵美姉ちゃんに起こるか俺は心配だ

そして、この人！

「優香」

「だから姉ちゃんって呼びなさいって」

俺の双子の姉であり（俺は姉ちゃんとしてつけてないが）三女、自称パーフェクトガールだが全くパーフェクトガールではないだが顔はいい。体つきもいいと思う。だがパーフェクトでは無い。性格的に

「宿題教えてください」

「自分でやれ」

「意地悪だな」

やはり性格的にパーフェクトガールではないな

そして最後！

「明美？」

「何？賢治お兄ちゃん」

秋山明美、小学四年生で俺を鬼という名の暴力女から守ってくれる優しい姉以外のオアシスだぜ！

何故かというところどころ甘えてきてそれが心をリラックスさせるから！

「お前は早く行かなくていいのか？」

「うん。海斗お兄ちゃんと違う班だし」

「そうなのか」

話しているだけで心が落ち着くぜ……

「ちょっと優香！賢治！学校遅れるわよ！」

台所から母さんの声が聞こえる

「早く行くわよー！」

「了解！」

その後、途中で優香と喧嘩して結局遅れてしまった俺と優香は先生にこっぴどく叱られた。

理由は簡単！いつもの事だから！

十一人の家族（後書き）

感想、よろしくお願いします！

チャンネル取り

学校が終わり、家に帰って夕食を食べ終わった後、我が家には8時〜10時のテレビゴールデンタイムと呼ばれる時間に九人の姉弟には家族の絆とかなしに毎日のように戦争が起こる。因みに番組を予約というものは可能だが見るには戦争に混じらなければならない。残酷である

「今日こそ俺が手に入れる！」

「待ちなさい！今日は私の番よ！」

第一の扉には双子の姉、優香が門番をしていた

「ふっ！これは戦争！番なんてないんだよ！」

「なにおー。ふざけるんじゃないわよ！」

「今日こそノラえもんを見るんだー！」

「子供か！」

優香が突っ込んでくる。甘いな！ノラえもんは二十四世紀から来たんだぜ！バカにしちゃいけないえ！

そうして取っ組み合いになって行く

「アッ……どこ触ってんのよ！変態！」

「こんな事故よくある事だ！気にすんな！」

色っぽい声を出した優香にちょっとかわいくなって思ってしまった

「隙あり！」

やばい！余所見してた！優香の一撃が！

その時！

「痛っ！」

俺ではなく優香が痛がる。あれ？どうなってんだ？

「大丈夫か？賢治」

その声は……

「英治兄ちゃん！」

我らが兄の英治兄ちゃん！

「お兄ちゃん！これは私と賢治の戦いなよ！」

「そうはいかないな……優香」

「なっ……何よ……」

英治兄ちゃんが静かに言う

「俺は今日、賢治とある駆け引きをした……それは……」

「それは？」

「賢治が大乱闘で勝ったら、今日のチャンネル取りをサポートしてくれて！それで賢治が勝った」

「なっ！賢治ずるい！」

そのずるいという言葉に反応する俺

「勝負にずるいも何も関係ねえんだよ！英治兄ちゃん」

「おう！」

「後は頼んだよ！」

「OK」

そう言っただけに向かって歩き出す。俺はもうふり帰らない！頼んだよ！英治兄ちゃん

優香のずるい！って声が聴こえたからもう一度言っただけ。勝負にずるいも何も関係ねえんだよ！何度でも言っただけ！

第一の門クリアー

第二の門そこには三人が立っていた

「兄ちゃん！今日こそ僕達は止めて見せる！」

三人の剣士——海斗、明美、桜が集った

「ほう、この兄に逆らうと？」

「そつだ！僕達は絶対にノラえもんを見る！」

ノラえもん……

「おい、お前らノラえもん見るのか？」

「賢治兄ちゃんも？」

こ……これはまさか……

「同盟を組もう」

そつ俺が言つと、三人がしばし相談する。どうかこの兄を尊敬してくださいませ

「三人で相談した所、信じる事に決まった。同盟を組もう」

海斗がここでリーダーシップをとる。もっと他の所でとろつよ海斗。リーダーシップ

「ありがとう。信じられたお兄ちゃんは嬉しいよ」

四人で手を合わせる

「行くぞ！最後の門に！」

「オーーツ」

俺達四人は最後の敵に挑んだ

第二の門クリアー

第三の門そこには……

「あんだ達が来るとはね。優香かと思ったわよ」

伝説の鬼、優衣が立っていた

「もう少しで……もう少しで着くんだ！リモコンを取れるんだ！負けるものか！行くぞ！」

「行くぞー！」

「……うん！」

「絶対に優衣お姉ちゃんが好きだけど……こればかりは譲れない！」

俺、海斗、桜、明美の順番で立ち向かう

「さあかかって来なさい。すぐ終わらせるわ」

「やれるもんならな！」

おれはこの時思った。なんだこのチャンネル取り

暫くして

「ハアハアハア」

「ハア、もう終わり？じゃあこれで最後ね」

もう残ってるまともな人間は俺しかない。ちくしょう！終わりなのか。ここまでできたのに

その時、脳裏に助けしてくれた三人の剣士の顔が思い浮かぶ。

「みんなが僕を応援してくれてるんだ！負けて……負けてたまるか
—————っ！！！！！！」

「な……何なのこれは？髪の毛が金色に……まさか！」

「俺は怒ったぞ—————！！！！！！優衣姉ちゃん—————！！！！！！」

俺の心の怒りが爆発する。勝ちだ！と、思った瞬間

「もう十時過ぎてるから」

「「え？」」

母さんの声で俺の髪は普通に戻る

「ほら、時計見て見なさいよ」

時計は10時30分を指していた。一気に熱が冷める。そんな時俺と優衣姉ちゃんは思った

「「何やってんだろ……」」

こうして一日が過ぎて行く

チャンネル取り(後書き)

俺も何やってんだろ……

ゲーム三昧

「はっ！」

「くっ！これで……」

「まだまだだな」

「あ！負けちゃった」

画面に映るKOの文字、ただいま俺と泪は大乱闘クラッシュユプラザーズをやってる。今は俺がポットを使い、泪がクイージーを使って俺が勝った所だ。元ネタが分からない？自分で考えたまえ

「ふっふっふ。俺に勝つには二十年足りねえな」

「くっ……流石兄貴……強い」

「おととい来やがれってんだ！」

無駄に誇らしくなる俺。何だろう。この妹に自慢する兄というのは

「こんどはあれやろっぜ！」

そうやって泪が指したのはゴンドラボールセットスパークキングゲデオ！だった。元ネタは分かるでしょ？

「ほお……あのゲームで俺に勝とうとするのか……いいだろう」

どこの悪役ボスみたいな感じで言い放つ

そう言つて大乱闘クラッシュブラザーズをゲーム機から取り外し、
ゴンドラボールセットを入れる

「負けないよ！」

「ふん！望むところだ！」

つてな感じでバトルが始まった。おれはポン ポプウを選び泪はその
子供ポン ポパンを選んだ。宿命の親子対決

「ポポポン ポン！！！」

「ポン？ポンポン！」

何話しているか俺には全く分からない。ご想像にお任せします

結果は最終的に俺がスーパーパイヤ人になったので勝利。負けたポ
ンポパンは「ポンポコリン！！！」とか言つて死んだ。哀れな運命だ

「こ……これでも勝てないのか……」

「諦めたまえ泪、君の今の力じゃ僕には勝てない」

「くっ！もう一回！」

「何度やっても同じ結果だと思つぜ」

とかいいながらも楽しいのでやる。結果は……

「俺の勝ちだな」

「またもや俺の勝ちだ。またもや死んだキャラクターはポンポコリン！……とか言っただけだ。お約束なのか？」

「くっ！兄貴強い……なら……最強の刺客を呼んでやるぜ！」

「とか言っただけ俺の部屋からリビングからダッシュで走り出す」

「暫くして……」

「どうしたの？あつ！賢治」

「まさかの恵美姉ちゃんを連れて来やがった！」

「兄貴をゲームでぼっこボコにしてくれ！」

「ゲーム？いいけど……何の？」

「ゴンドラボールセットスパーキングデデオ」

「長いタイトルを言う」

「あーあれね。いいけど。賢治は相当プライドに傷がつくわよ？」

「どんと来いやー！」

「そう、ならいいけど」

そう言つて横に座る恵美姉ちゃん。何だろつ、途轍もなく嫌な予感が……

「はい、勝つた」

「……え？」

画面を見ると確かにKOという文字が、何が起きたのか全く分からん

「何かよくわかんないからもう一回！」

「いいよ」

そう言つて試合をもつ一度はじめるが

「勝つた」

「は？」

画面を何度見てもKOの文字が消えない

「一体どうやって勝つたんだ？」

「え？普通に……」

「やった兄貴を倒した！！！！」

普通に数秒で倒せるゲーマーなんていねえよ。そして泪、お前は倒してない

ますます深まって行く恵美姉ちゃんの謎。そして喜ぶ泪だった。恵美姉ちゃんどうやって勝ったんだ？教えて欲しいぐらいだぜ

ゲーム三昧 2

俺は何度恵美姉ちゃんにゴンドラボールセットスパークキングデデオで挑んでも勝てない。どんな事をしても数秒で倒される。どんな闘い方なんだ！数秒なので全く分からん！

「も……もう一回おねがいします！」

「賢治じゃ勝てないと思うよ？」

「そうだ、そうだ！諦めろ！」

泪関係ねえだろ！

「そんな事言わずに……お願いします！」

頭を下げてお願いする俺。これはこのゲームを持つてる俺の意地なんだ！何としても勝たなければ

「じゃあ……後一回ね？」

そう言った時、リビングに戦士が集った

「何やってんの？賢治」

「あ、優香」

「だから姉ちゃんをつけなさいって……」

一人目の戦士、優香

「賢治兄ちゃん！何してるの？」

「おっ！桜」

二人目の戦士、桜

その後、姉弟全員が集まった

「で？そのスパークキングデデオって皆ルール分かるの？」

優衣姉ちゃんが先頭に立って言う。どうやらゲームがやりたいらしい

その結果、殆どの人物が知らなかった。主に女子が。ってか女子だけ

「じゃああれやりましょー！」

あれ、と言えばこの家族全員が分かる。そう、大乱闘クラッシュシュプ
ラザーズだ！この大乱闘クラッシュシュプラーズ。何故か十一人まで
同時に遊ぶ、しかも萌えキャラからいかついキャラまで何でもいる。
しかも常時新しいキャラを配信しているので大人から子供まで遊べ
る。流石クラッシュシュプラーズだ！

てな訳で、少し恵美姉ちゃんと戦って勝ちたい気持ちもあるが、こ
こは抑えて、大乱闘クラッシュシュプラーズのスイッチを入れると

「よおなにやってんだ？」

初の父さん登場！

「あつ！父ちゃん！いま大乱闘クラッシュジュパザーズ皆でやるんだよー！」

「おっ！マジか！最近俺もやりたかったんだ！やるうやるう！」

そして父さんが加わる

「あら？大乱闘クラッシュジュパザーズやるの？じゃあ私もやる！」

よく分からんが母さんも参戦！

そしてパンパカパーンの音と共にゲームが始まった

「最初は十一人対戦、次はトーナメントな」

「了解」

優衣姉ちゃんが率先して言う。強いのか？優衣姉ちゃん

因みに十一人対戦とはその名の通り十一人が仲間関係なく対戦する勝負であり、これが結構迫力がある。面白いぞ

そして十一人対戦した。まあ勝者は何と父さんだった。意外である。まあ練習だったから皆本気だしてないんだろーな！も……もちろん俺もだけど！

「よっしゃー！！！！じゃあ行くぜ！勝った奴は一人誰かに命令できる。という券を賭けて戦えー！！！！！！！！！！」

「オーーーーー!!!!!!」

何故かハイテンションな俺達。そして大乱闘クラッシュプラザーズ
大会は始まった

ゲーム三昧 3

てな訳で我が家の命令権を賭けて勝負！

第一回戦 桜VS英治

「……………どれにしようかなー」

「どれにしよう」

「早く決めてくれよー」

何しろこの大乱闘クラッシュプラザはキャラが多いから選ぶのに時間がかかる

結局十分かかった

桜はノラえもんで英治兄ちゃんはクイージー

バトルが始まった

「……………私はこれを使う」

ノラえもんが出したのがタケロプター……………え？

桜空飛んじゃダメだろ！クイージー空飛べないよ！

「……………そしてこれ、空気砲」

……もう言ってるじゃん

そしてタケロプターで空を飛んで空気砲で攻撃。英治兄ちゃんはゲームスキルで必死に避けるもまけた

初っ端から何だよこのなんでもあり！！！！おかしくない？

ってな訳で桜の勝利

二回戦

海斗VS母さん

「負けないぞ！」

「「うちこそ母という名の意地にかけて負けられない！」

……母という名の意地って……何？

まあそんなこんなで

海斗はピケチュウ母さんは……アンポンタンだ

バトルスタート！

「行くぞピケチュウ！十万ボルト！」

まともな戦い方だな。これがいい

「ウフフ……アンパンチ」

その瞬間画面に映るKOの文字……え？どっちが勝ったの？

「勝っちゃったー」

「負けちゃった……」

なんと母さんの勝利！しかし……

「おい、母さん大人げないぞ」

しかもアンパンチって……

「勝負に手加減なんてないわ！」

……それでも大人げない

てな訳で二回戦、勝者は母さん！

三回戦

泪VS優衣

「いくら姉ちゃんだからって容赦しないよ！」

「かかってらっしゃい」

最早なんでもありの大乱闘クラッシュシュプラーズ第三回戦スタート！

泪はカーブイを優衣姉ちゃんは青鬼を選んだ

「優衣姉ちゃんに合うな……」

「賢治……」

「何でしょう?」

「後で私の部屋に来てお話ししようね?」

「えーと僕は後で宿」お話ししようね?」「はい……」

今日の夜、優衣姉ちゃんにボコられる確定。何でこんな時に恵美姉ちゃんはどっか行ってるんだ!

まあとにかくスタート!!

「終わりだ!」

いきなり泪はカーブイで青鬼を吸い込もうとするがよけられた!

「何だつて!」

「終わりよ!」

カーブイを金棒で叩こうとする。何か白熱する戦いだぞこれは

「くっ!」

緊急回避を使って避ける。何かすげえぞこれ

「何の!」

カーブイはハンマーカーブイになって応戦。最早何かすごくバトル
って感じだわ

「これで終わりだー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「負けない！」

何時の間にか最終決戦それぞれ必殺技を出して勝者は……

「よっしゃー勝ったー！ー！ー！ー！ー！」

「ま………負けた………」

泪の勝利！

「すげーぞ泪！」

「サンキュー兄貴！」

何かヒーローインタビューみたいな感じになった

「流石ね、私の妹だけあるわ」

「姉ちゃん………」

そう言って手を繋ぐ。何だよこれは？もう次いくぞ次！

第三回戦、勝者は泪！

てな訳でめんどくさいが第四回戦

父さんVS優香

「ふっ！練習で勝った俺に勝てるかな？」

「わ……私だって練習してたんだから！負けないわよ！」

父さんはケンキロウを優香は……

「何故ドラルド？」

「強いじゃない！」

「いや、強いけどね？お前には似合わないと思」何？「………何でも
ない」

もうゲームスタート！

「行くぜ！僕と百列権」

僕と百列権ってなんだよ……！

「負けないわよ！」

優香はよける

「喰らえー……！」

続けて言い放ちドラルドの必殺技らんらんらんを繰り返す。何だよそのネーミングセンスのなさは

「グハッ！」

だが見事にクリティカルヒット！ケンキロウは倒れた！

「ま……まけた！」

「勝ったー！」

てな訳で勝者は優香！第四回戦終了！

やっと第五回戦

戻ってきた恵美姉ちゃんVS明美！

「……勝つ！」

「賢治お兄ちゃんに絶対に水族館連れて行ってもらうんだから！」

いや知らねえよ

恵美姉ちゃんはプーチ姫で明美は涼宮クルヒ何だろうこのネーミングセンスがいい奴が全くない

恵美姉ちゃんが勝つ……と思ったがなんと意外な展開！

「世界改変……」

小さな声でつぶやいて必殺技を行う。何だろっこの威圧感は

するとその瞬間！恵美姉ちゃんのプーチ姫が画面に吸い込まれKOの文字！

「ま………負けた」

肩を落とす恵美姉ちゃん

「絶対賢治兄ちゃんに水族館連れて行ってもらっただから！」

だから知らねえって。しかし何だかんだでこの明美の威圧感はずい！一番強いかもしれないな

勝者は明美！因みに僕は一人分余るので不戦勝でした！

「ずるい！」×10

「え？」

その後優衣姉ちゃんにボコボコにされたとき

じ………次回につ………じく

ゲーム三昧 3 (後書き)

こんなながい話になる予定じゃなかったんだけどな……

ゲーム三昧 4 (前書き)

今回でゲーム編終了

ゲーム三昧 4

残った勇者！

桜、 母さん、 泪、 優香、 明美、 俺

年下が結構残った。母さんは何故勝ったのかよく分からないがきつと練習したんだろう

何しろ明美はすげえ！世界改変の一言で恵美姉ちゃんを倒したんだからな。案外隠れたゲームスキルが……あるわけないか

ふっ！俺は優衣姉ちゃんにボロボロにされたけど頑張るぜ！

第六回戦

桜VS母さん

キャラは引き続き同じ

「……勝たせてもらおう」

「ウッフ負けないわよ」

何か怖いけどゲームスタート！

「秘密道具、一寸法師印の吉備団子」

桜は秘密道具で攻撃する。あれって喰らえば負け確定の必殺技じゃ

……

「バイバイマン防御よ」

何処からともなくアンポンタンのライバルだと思われていてじつはかなり力のレベルが違うと言われているバイバイマンで防御。喰らったバイバイマンは自分から落ちて行く。な……なんて恐ろしい技なんだ！

「秘密道具、空気砲」

またもやさつきと同じ空気砲を出し攻撃する。

「空を飛ぶわ」

そう言って元々使えるマントを使い空を飛ぶ

「秘密道具、無敵砲台」

その声とコントローラーの操作により漫画ではあのお金持ちが使った伝説の砲台無敵砲台登場

「もう、終わり」

そう言って終わりへのチケットZボタンが押される。だが母さんは

「仲間を呼んでトリプルパンチ」

そう言うと四角いパンと唇がたらこ唇のような茶色の戦士が集まる

「トリプルパンチよ」

そう言うと三人の戦士は無敵砲台の出した球と衝突。そのパンチは

……

なんと球を跳ね返した！

「おーっ！」

その場にいた九人が驚く。その球はノラえもんへと向かい当たった

「勝ったー！」

「……負けた」

流石だな桜、こんな時にもあまり動じてない

しっかし母さん……何処でその力を手に入れたんだ？

第六回戦

母さん勝利！

第七回戦

泪VS優香

「いくら姉ちゃんだからって容赦しねーぜ！」

「妹なんかに負けてたまるか！」

なんかよく分からんがとにかくスタート！

まずドラルドがポテトを投げる

「近寄れないでしょ」

「姉ちゃんわたしを甘く見過ぎだよ」

そう言うとカーブイはポテトを吸い込んだ！

「私のポテトが！」

なんか驚いてるけど別にどうって事なくね？現実じゃないから

「一瞬で終わらせる！」

泪が言うとカーブイはソードカーブイに変わって必殺技めつた斬り
を行おうとするが

「ハハハ」

「なんで笑ってんだ姉ちゃん！」

「この時を待っていたのよ！」

そうやって必殺技 I・m・l・o・v・n・i・t を発動。カーブイの下と上
に出現したハンバーガーがカーブイを挟む

「ふう………」

「姉ちゃんつえー」

画面にはKOの文字が

第七回戦

優香の勝利！

第八回戦

明美VS俺

「頑張れー明美ー」

「がんばって明美姉ちゃん！」

「頑張るよ！」

俺には声援が来ない、いいぜ！俺はいつでも孤独な旅人だからな。
情は仇となる

……泣いてもいい？

「賢司兄ちゃんがんばって！」

この声は海斗！

「ああ兄ちゃんも頑張るぜ？」

今の一発は兄ちゃんにとって限りなく大切な応援です。ありがとう
海斗

第八回戦スタート！

「世界改変……」

「え？吸い込まれちゃうの？おい！俺！これって一撃絶対必殺だろ！」

「大人げないよ。これは水族館へ行くための力だから」

世界改変とか使う奴に大人げないと言われたくなかった！

「弱いよ海斗」

優香が痛恨の一言！

あれ？汗が出るな……

第八回戦勝者

明美！

第九回戦

母さんVS優香

「ここまで来たから負けるには……」

「ここで立ち止まるわけにはいかない！」

何処ぞの青春してる男の会話だよ

「頑張つてー」

九人の応援が響く

セミアイナルスタート！

「まずはこれで」

母さんはバイバイマンを呼び出して攻撃する。敵なのに……最早奴隷だな

「こんな雑魚キャラ呼び寄せて何するの？」

すぐにどっかへ飛んで行く雑魚キャラ……南無

「やっぱりダメかしらじゃあ……アンパンチ」

伝説の必殺技アンパンチを放つ母さん

「そんな攻撃私に喰らうとでも思うの母さん！」

すぐさまよけてハンバーガーで攻撃。いやゝ複雑だな

「なかなかやるわね……仲間集合！トリプルパンチ！」

その声でトリプルパンチをする三人の勇者が集う。そのままパンチ！

「後ろがガラ空きよ！」

「え？」

何時の間にか後ろにいたドラルド

「終わりよ！」

ドラルドの渾身の一撃！倒れたあと、KOの文字が映った

「勝った！」

「強くなったわね、優香」

「ありがとう。母さん」

そう言って握手する母さん達。なんかデジャヴ。

第九回戦勝者

優香！

第十回戦！

優香VS明美！

「決勝戦です！命令権は誰のものに？」

何時の間にかリポーターとなってる英治兄ちゃんを見ながら最終決戦。これで終わるので作者も大喜びだ！

「絶対に水族館……」

「負けないんだからっ！」

「頑張ってくれー」

ファイナルバトルスタート！

「世界「ハンバーガー！」くっ！」

世界改変を行おうとする明美にすかさずハンバーガーを投げる優香

「はぁーっ！」

何処からともなく無数のナイフが優香を襲う！

「負けない！」

優香も無数のポテトで応戦する

「でやっ！」

ぶつかり合うポテトとナイフ。一生見られない様な光景がそこにあつた

「はぁっ！」

「こ……これで終わりの様ね」

「え、ええ」

両者残りのHPも少ない

「ダーツ！」

最後の一撃が決まる！残ったのは……

Winner！ドラルド！

「ハアハア」

TVでコントローラーを操作してるだけなのにすごく疲れていた優香の姿と倒れている明美の姿が見れた

「おめでとう！」

「おめでとう」

「おめでとう」

その後にも何処ぞの逃げちゃだめだ少年が主人公の最終話シーンみたいな感じでおめでとうが続く

「強かったね。姉ちゃん」

「また戦おうね」

「それで、命令は誰にするの？」

優衣姉ちゃんが聞く

「賢司！明日学校の帰り付き合いなさい」

「え！めんどく「分かった？」分かりました」

こうして俺の明日の放課後の予定が埋まったと同時にゲーム大会は終わった

ゲーム三昧 4 (後書き)

次からは普通に日常を書いていきますんで！

優香の連れ返し

ゲーム大会の翌日。学校に眠るために来ているような人物「俺は急いで帰ろうとしていた

「帰ろうぜ賢治」

友達の〇に呼ばれダッシュで向かおうとする。何故かと言つと……

「おう！さつさと帰ろう」「待ちなさい」「何でしょうか？優香さん？」

そう、命令で優香に放課後に付きあう事になっていたからだ。勿論嫌な予感しかしなかった俺は急いでた訳だ

「あ、〇君。ちょっとこいつ借りて行くわね」

「〇、助けて……」

「あ、どうぞ」

「この薄情者が！裏切り者め！」

簡単に裏切る薄情者の〇はもういい！とにかくこいつを……

「さあ行くわよ！」

「ちよっ……」

俺の力じゃ通用しないらしいな！畜生！

首を掴まれながら玄関に移動しどこか分からない場所へ連れてかれる……ような気がする

「で、何でミスドーナツにいるんだ？」

連れて行かれたのはミスドーナツだった

「いいじゃない。新発売のドーナツがあるから食べたいのよ」

「そうですか。で、払うのは？」

「アンタに決まってるでしょ？」

「そつつか」

俺の財布はこの時、金欠になる事が決まった。

「さっ！ここにいるのもなんだし早く入りましょ！」

「了解」

元気なのはここに奢ってあげる人間がいるからだろう。いつか復讐してやる！

「どれにしようかな」

とかいいながら、苺ドーナツ、チョコドーナツ、etcを入れていく

……買い過ぎじゃね？これじゃあ金欠ではなく破産しちゃう

「そんな食べていいのか？」

「いいのいいの。私あんまり太らない体質だし」

「それじゃあお金が「なに？」何でもない」

「じゃあいいわよね」

この悪魔め！ここに優衣姉に次ぐ悪魔が降臨した！

「まっ！「んくらいでしょ！」

で、買ったのは十個程……買い過ぎじゃ……

「3000円です」

「……………」

「ピッタリ3000円にしといたから。感謝しなさいよ」

何処に感謝すればいいんだ？

渋々野口さんを三枚消失させてテーブル席に移動する。

二ヶ月分だったな……

静かに食べ進める優香。こつやつて見てるとうん。可愛いと思う。性格も良ければいいんだが……現実はその上手く行かないからな

「なに見てんのよ。変態」

「何で変態扱いされなければいけないんだよ」

「女の。しかも姉をじつと見てるなんて変態としか言いようがないじゃない」

俺は知らぬ間に変態と認定されたらしい。認定すんじゃねえ！

「はい、食べ終わった」

早！まだ五分程しかたってねーよ！

「あれ？後一個は？」

「優しい姉からのプレゼントよ感謝しなさい」

「……あざっすー！」

「ま！今日の目的も果たしたし。帰りましょ」

俺は苺ドーナツを食べている所で手が止まる

「あれ？もう終わり？」

「そうよ。今日ドーナツ食べれたし」

「良かった、良かった」

今度は福沢さんがなくなってしまうのかと心配してたんだよ

「で、なんで俺を誘ったんだ？涙でも良かったんじゃ……」

「べ……別に！アンタの方が近いし……」

その後が聞き取れなかった

「聞こえねーよ」

「とにかく！いいじゃない！さっ！帰りましょ！」

「……はいはい」

何故かテンパってる優香を見ながら家路を歩いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4859v/>

十一人の家族

2011年10月9日07時29分発行